

Chaucerの“mutability”のtoposについて —TroilusとBoethiusを中心に—

河 崎 征 俊

ChaucerのBoethiusに対するいわゆる「恩義」は、すでに多くの学者たちによって集中的かつ徹底的に分析され、論議されているが、特に、*Troilus and Criseyde*の最後に描写されているepilogueは、天上の喜びとこの悲惨な地上の虚栄およびその一時的な快樂との対照化において、Boethiusとまったく同じ精神性に基づいて構成されているということで良く知られている。このepilogueに関して様々な意見が提示されているが、なかでも、このepilogueは*Troilus*の他の箇所と矛盾しているとするW.C. Curryの批判は、詩人の芸術性およびテキストのエビデンス等をほとんど公正に捉えていないという理由で、理解し難い。というのも、epilogueが*Troilus*のプロットに漂うロマンティックな価値感と矛盾し合っているとすれば、詩人の人間性や登場人物の中にしばしば現れる道徳的内省にも同じような矛盾を見出さざるを得ないからである。もしこうした矛盾を認めてしまうならば、例えば、*Criseyde*のあてにならないこの世の喜びに関する観照も、*Pandalus*のFortuneの変化に関する意見も、そしてChaucerの運命とか偶然性とか神の摂理等に関する言及もすべて部分的で不完全な言説となってしまうであろう。だが、事実、以上取り上げた問題点は、epilogueと同じようにBoethiusの影響を受けたChaucerのロマンスのコンテキストにおいて不可欠な要素となっている。DanteがBoethiusのtopos—つまり、“O insensata cura de' mortali”⁽¹⁾—を使って天上の喜びと地上の関心事（例えば、富や権力の追求、肉体的快樂の追求等）とを対照化させながら*Divine Commedia*を書いたことは有名であるが、こうしたDanteの世界と同じように、Chaucerの描く主人公も“nel diletto de la carne involto”であった。したがって、本論では*Troilus*のepilogueとりわけいわゆる“flight”スタンザにおけるBoethiusとChaucerとの同質性および異質性を探りながら、本作品に見られ

る様々な主題の内的統一性を考察することにした。

すでに示したように、epilogueの矛盾といわれるものは、実際、Chaucerの二つの相異なった、だが相互補完的ともいえる視点の意識的並置から現れている。つまり、地上の反省と不運に対するナイーブな態度と、天上の哲学的教訓がそれである。ちなみに、前者が単なる意見の域を出ないものとなっており、後者が認識論に属するものとなっていることも考慮すべきであろう。Boethiusの*De Consolatione*のダイアローグでは、この対照的な態度は、まず、ナレータと哲学夫人によって提示されているが、古典時代および中世時代の思想においてコンヴェンショナルなものとなっていたこのアンチテーゼは、Troilusの認識論的構造体の根底に流れている根本思想であり、詩人の最も卓越せるアイロニーを強めているものと思われる。

“flight”スタンザを見ると。詩人たちが用いた神格化のモチーフやネオプラトニストたちが追求した霊的世界等がBoethiusの*topos*と密接に関連し合い融合し合っていることがわかる。⁽²⁾ Troilusの現世の移ろい易い「肉欲」に関する屈辱や天上の“pleyn felicite”に関するヴィジョン等は本質的にBoethius的であると思われようが、他のモチーフ、例えば、天上と地上に関する観照とか偉大なる天上と無意味なる地上との比較とか地上の愛に対する嘲笑とか「上昇」のモチーフ等は、神格化のモチーフや霊的世界と共通する要素を具有しているからである。さらに、中世の注釈者たちがLucanやCiceroやDante等の説明のために利用した教義と同種の哲学的教義をBoethiusの解釈に援用していたという事実も見逃せないであろう。つまり、ChaucerはBoethiusの思想に影響された作品の中に「上昇」のモチーフを導入するとき、まったく新しい文学的素材を用いたのではなく、まさに付加的に当時の思想を付け加えていったのである。しかるに、ある点で、Boethiusの描いた“flight”のメタファーとTroilusの「上昇」のモチーフとの間には重要な相違点が見られる。というのも、前者が本質的に観照する精神の「上昇」の言及であるのに対し、後者は「死後の魂の旅」を表象しているからである。

にもかかわらず、これら両者の間には見逃すことのできない相違点が見られているものの、これら二つの形象化された世界はともに互いに密接に関わり合っているといわなければならない。なぜならば、地上の生きている人間（哲学者）の至福と死後の肉体から切り離された魂の至福はともに観照の中に存在しているからである。それは、自然哲学を好んだ後期ストア

派の哲学者たちによる天上の観照とかネオプラニストたちのアイデアの世界や最高善の観照、およびキリスト教神学者たちが抱いた *visio Dei* 等を例に挙げれば首肯し得るであろう。このように、これら二つの形象化された世界は、同じイメージアリーを共有し、同じ教義を共有していたということもあるので、一つの作品の中にこの両者のイメージを結合させ融合させることが可能となったのである。この伝統の洗礼を受けていた詩人Chaucerは、したがって、Troilusの魂の「飛翔」と思弁的「上昇」とのアナロジーによって、Pompeyの魂の死後の“flight”や DanteおよびScipioのvisionary ascentに接近することができただけでなく、Boethiusの思弁的「飛翔」やイメージアリーにも接近することができたのである。

近年のChaucer学は、*The Canterbury Tales*に登場するMonkの悲劇の定義の中に、Boethiusの悲劇論に対する中世的解釈の影響力を見出しただけでなくTroilusに対するその影響力の意義をも正当に評価している⁽³⁾ 十四世紀の悲劇の観念を調べればわかるように、Chaucerが中世の物語をフィクションというよりもむしろ真の歴史であるかのように考えていたということがわかる。Troilusの悲劇は、詩人によると、“olde bookes”の中に記録された“storie”であり、十二世紀に見られるようないわゆるフィクションではなかった。この事実も当然銘記しておくべきであろう。ところで、Troilusの主人公Troilusは、他の悲劇の場合と同様に、「繁栄」から「悲惨」へと転落していくのであるが、ここでは、詩人の絶えざるFortuneの変化や主人公の悲しみ等の言及によって、さらにはTroilusの不幸な結末に関する言及によって、その運命の逆転が強調されている。つまり、Monkが述べたてるSamsonやHerculesといった著名な人物のように、Troilusは自らの恋人によって、自らの死に遭遇し、自らの絶望によって、自らの死を求めがゆえに、悲劇性がますます増大していくことになるのだ。

しかしながら、ここには重要な相違が見られる。すなわち、Troilusは高い地位から転落した人間ではない。というのも、彼は最後まで騎士としての名誉を享受し、王子としての富と威厳を享受しているからである。さらに、彼は戦場で不名誉な死に方をするわけでもなければ、また、他の詩人たちが英雄詩の中で讃えてきたような類いの死に方をするわけでもないからである。Troilusが遭遇する「繁栄」と「悲惨」、彼が経験する運命の変化—これらは悲劇的な主人公の浮沈というよりもむしろ伝統的な「女を恋する男」の浮沈である。結局、詩人は、自らの主題として、世俗的な威厳の喪失や高い地位からの転落よりもむしろ、現世の愛の移ろい易さを選択

したことになる。だが、彼がこうした愛のコンテクストに悲劇の様式や構造とともにコミックの要素を付加したことも見逃せないであろう。*Troilus*の中でトロイ戦争は愛人たちの愛の歴史に悲劇的コンテクストを提供しているけれども、⁽⁴⁾また、愛人たちの結末も悲劇的であるけれども、Chaucerが描いたこの作品には伝統的な喜劇的要素も含まれていることがわかる。詩人は、迫り来るトロイの運命を背景にしながら愛人たちの喜びと悲しみを描写するとき、悲劇的なものとして普遍的にみなされている歴史的テーマと、愛の主題—これには、騎士道ロマンスの英雄的価値観だけでなく、悲劇的価値観ならびに、エレジー的価値観等も含まれている—を並置させているからである。そもそも、中世の詩的理論は、通常、戦争の主題を悲劇的に割り当て、愛と結婚の主題を喜劇に割り当てていたのであるが、このようなやり方は、本質的に、文学的ジャンルと社会的レベルとの相関性に根拠があったようである。例えば、貴族や宮廷人たちの織り成す社会的行為は叙事詩のジャンルや悲劇のジャンルにおいて描かれていたが、一方、中産階級および下層階級に属する人々の行為は悲劇的に描かれていた。Danteは宮廷言語に有益な主題としてVenusのテーマをsaulusやvirtus等と関連づけているけれども、多くの中世の文学理想たちは中世における宮廷叙時詩やロマンスの人気を十分考察することができなかつたといわれている。また、中世の詩学は、すでに、高位の人間の武勲を描いたり、運命の突然の移り変わりを描いたりするのに適したジャンルや文体についての理論を所有していたが、しかしながら、それは、恋愛事件の描写や恋情に最も適した理論を展開させていたわけではなかつた。つまり、中世の詩学は、高貴なる愛人をどのように描くべきかという問題や、エロスの影響下にある愛人の感情や行状を下層階級の人間のそれらとどのように区別すべきかという問題を十分把握するところまで達していなかつたのである。そのような問題は、大方、詩人たちの手に委ねられていたのである。

ゆえに、宮廷ロマンスの作者は愛のモチーフと武勇のモチーフを結びつけ、ジャンルそのものを何ら変えることなく、叙情的要素あるいは喜劇的要素までも愛人の運命に関する話の中に統合化させてしまったのかもしれない。したがって、戦争を描こうと恋愛事件を描こうといずれにせよ、彼の描くロマンスは、その主人公が高貴な生まれの地位の高い貴婦人とか騎士たちであるかぎり、叙事詩との類似性を留めていたということになる。同じように、Chaucerの描く*Troilus*の不運なロマンスも叙事詩的悲劇とい

うことになるであろう。ここでは、Virgilの *alta tragedia* の場合と同様に、また、中世のTristanやLancelotのロマンスの場合と同様に、「愛」と「武勇」と「破滅」のテーマが密接に結びつき合っているからであり、また、DidoやAchillesやParisおよび古典時代もしくは中世の他の多くの主人公たちの恋情と同様に、Troilusの恋情が、結局、〈死〉をもって終わっているからである。

さて、“flight” エピソードを克明に調べればわかるように、われわれはそのエピソードから詩人Chaucerのironic “tragedye” とその曖昧性がより明確に浮かび上がってくるのがわかるであろう。The Knight's TaleにおけるArciteの死は比較的悲劇的ではない。だが、Troilusの死に関する説明の後に“flight” スタンザを挿入することによって、詩人は自らが描く“tragedye” とLucanやBoccaccioたちが描く“tragedye” との連関性を強調していると見てよいであろう。だが、一方、主人公の死後の笑いというモチーフはLucanやBoccaccioの詩の中ですでに達成されていたのであるが、それはまた、ChaucerのTroilusの中で喜劇的要素を強く漂わせているようである。これら二つの対照的なジャンルについてのこのようなパラドクシカルな関わりは、例えば、ストア派の哲学やBoethiusの哲学およびキリスト教の教義の中に見出すことができるが、悲劇的価値観と喜劇的価値観とのいわゆるテンションがChaucerの詩作品全体に存在していることを物語っている。つまり、最初は悲劇的意識が作品のプロットの中で支配的となっているのであるが、結局、最後に喜劇的ヴィジョンが勝利をおさめるからである。Troilusの最後の姿を思い浮かべればわかるように、世俗的悲劇が〈無〉の中へと消散して行くからである。

ChaucerはBoethiusを断片的に取り入れることは困難であった。De Consolationeは真の至福として考えられる永遠なる善のヴィジョンを軸として展開し、永遠の現在としての神の摂理の観念において頂点に達する綿密に論証された堅固な体型を成す作品として中世の多くの人々によって読まれてきたからである。例えば、Fortuneという観念を作品全体から切り離してみると、つまりもとのコンテクストから切り離してみると、この理論体系の統合体は理解し難いものとなり、しかもこのように切り離れた観念そのものも見えなくなってしまうであろう。というのもこのFortuneそのものは作品構造全体において他の観念と互いに関連し合いながら本来の意味を保っているからである。ChaucerはBoethiusのFortuneの観念と神の摂

理の概念を自らのナラティブの中に導入することによってTroilusの悲劇的要素を一層強調することに成功したようであるが、しかしながら、Boethiusの理論体系そのものだけを見ていると、人間の悲劇性の意識は消え、悲劇的価値観もその威厳を失ってしまうであろう。というのも、地上の恐怖や現世の悲しみの対象はほとんど重要性がなくなってしまうからである。そして、結局、Fortuneの変化はその重要性を失うからである。ゆえに、「不運」は「繁栄」にとって好ましい概念ということになる。なぜならば、「不運」は「真の善」の認識とつながっているからである。もし地上の「不運」と「繁栄」が無意味なものとなれば、高い地位からの転落を意味する悲劇観も、結局、無意味なものになってしまうであろう。したがって、悲劇の可能性はアクションの中にあるというよりもむしろ、キャラクターの中にあるということになる。すなわち、それは「真の善」を無視する主人公の性格の中に現れ、主人公のhuman conditionの中に現れてくるのである。

ちなみに、真の悲劇的カタルフィは、高い地位にいる公明な人間の転落というよりもむしろ、Tartarusへの降下であるように思われる（つまり、呪われた人々に対する天罰ということになる）。ゆえに、最も悲劇的な運命は、肉体の死というよりもむしろ、魂の死ということになろう。Danteはこのような議論をInfernoやParadisoにおいて行っているが、古典時代の詩人たちや他のキリスト教詩人たちは、詩的コンヴェンションと倫理的教義との妥協を求めることだけに終始していたといわれている。だが、Chaucerも、「至福」と「悲惨」に関する詩的観念および哲学的観念の妥協を求めているといえる。詩人は「繁栄」と「不運」の交替を基礎とする伝統的な悲劇的パターンにしたがっているとはいうものの、それでも彼はBoethiusの倫理学とキリスト教神学の観点からこの「繁栄」と「不運」のアンチテーゼから生み出される最終的なmutabilityを十分意識しているものと思われる。

Troilusのepilogueの最終場面と同様に、“flight”スタンザでも詩人は、自らが描くロマンスの悲劇的無常観を真の倫理的パークペクティブの中に位置づけ、自らの限られたヴィジョンをBoethiusの倫理学で補完しようとしている。つまり彼は、慰めと道徳的教訓を詩の理想とするHoraceの詩学にしたがいながら、AristotleおよびPlatoの倫理学やスコラ哲学の神学等へと自らの詩を方向づけようとしていたのである。De ConsolationeにおいてBoethiusが失った善は明白なる善であったが、彼が投獄される前に享受し

ていた幸福は世俗的な幸福であり、誤解と誤謬に満たされたものを内容としていた。哲学夫人の側から見ると、少なくとも、そのように判断される。だから、当然、悲劇はmutabilityのテーマと関わってくることになる。つまり、Fortuneの定めなき変化・変遷とか、「幸福」と「悲惨」の交替と関わってくることになる。Boethiusの哲学のコンテクストにおいては、喜びから悲しみへの悲劇的变化は、本質的には、天上の真実の世界に属するというよりもむしろ、地上の(terrena)一時的な(temporalia)価値観の世界に属するといえるからである。

ところで、DanteはBeatriceの愛人であってFortuneの友人ではなかった。つまり、彼は現世の暗い森から揺るぎない不変的な神の世界へと観照の旅を続けていくからである。Commediaは確たる主動天のヴィジョンへの還帰とともに終わっていることで注目されているが、Chaucerの描くTroilusも、それと同様に、変化・変遷というものを超越した真の至福のヴィジョンで終わっている。したがって、ChaucerとDanteはともに、mutabilityのtoposを独自の手法で展開し、世俗的価値観と神的価値観(つまり、一時的なる善と永遠なる善)というアンチテーゼを強調していることになるであろう。とはいうものの、Troilusの主人公TroilusはDanteの場合とは違って、少なくともプロットの面から見れば、政治的色彩を帯びているとはいえない。すなわち、Troilusの見識は愛人を見識であって、政治家の見識ではない。彼がFortuneの定めなき矛盾という悲劇的教訓を学び取るのは、トロイの王国の没落からではなくて、愛するmistressのCriseydeの喪失からである。というのも、Danteの永遠の都市の探求(an urbs eterna)が、彼を神の国や教会へと導いているのに対し、Chaucerの描く不運な愛人(Troilus)と気まぐれな女性(Criseyde)の悲劇は、世俗の世界のはかなさや脆さといった伝統的な悲劇的背景のもとに生み出されているからである。Troilusは、運命の定めによってトロイの町が没落しようとしていることも知らずに、運命によって自らが愛すべきmistressから引き離されていくことだけに意識を集中させている“Thus to be lorn, it is my desti-nee.”)。結局、Chaucerは現実の悲劇的なmutabilityのテーマを恋愛事件という観点からしか提示していないことになる。

Boethius流に置き換えるならば、Troilusにおける真の悲劇的テーマは、トロイの町の没落ということになるであろうが、しかしこれは、Troilusの運命の変化を強調し、それと深く関わってはいるものの、作品のプロットには現れてはいない。Troilusの時期尚早な死はトロイの町の運命とは無縁で

あるため、かえってそれが彼を悲劇的運命から救い出していることになる。したがって、他の登場人物たち、例えば、HecubaやPriamやPolyxenaやCassandraおよびAstyanaxたちのこれから起こり得る悲劇と比較すると、Troilusの悲劇性はどちらかといえば深刻とはいいい難いであろう。

*Troilus*で愛人たちのaffectionを扱うとき、Chaucerは人間のageの問題—例えば、恋愛に没頭する青年、名誉と富を追求する成人、そして欲望を追求する老人たちの問題—を提起しているだけではなく、世俗的事物に向けられた「情熱」はすべて有害であると捉えたBoethiusの倫理学の価値観を意識しているようである。中世の哲学によると、affectionは感覚や想像力を含めた運動であり、正しい理性を妨害するものであると定義されていた。⁽⁵⁾ さらにそれは、「喜び」、「希望」、「恐怖」、「悲しみ」という感情に分類されていた。ちなみにそれは、善・悪の有無を考察する場合、二重の意味を帯びてくるといえる。例えば、「喜び」が現在の善に関わり、「希望」が未来の善に関わるのに対し、「悲しみ」は現在の悪に向けられ、「恐怖」は未来の悪に向けられていたのである。このようなpassionはすべて、それ本来の目的に向けられれば有徳なものになり得るかもしれないが、地上の対象物に向けられると有害なものとなるからである。

ChaucerはCriseydeの「恐怖」に対する性向や、Troilusの「希望」と「絶望」の交替およびPandarusのTroilusやCriseydeに対する共鳴等をかなり繊細に描写しているが、このようなさまざまなpassionは、紛れもなく、地上のあらゆる事物や一時的な善・悪に向けられたものである。だが、このようなpassionは、Boethius的観点からすると、有害なものとして非難されるかもしれない。事実、Troilusも天上の愛を無視する人々を非難するとき、Boethiusの常套句を残響させている。*De Consolatione*において哲学夫人は相手のBoethiusを同じような問題で叱責しているが、このような常套句の反復は、実際、Troilusの、「絶望」とBoethiusの「悲しみ」とのアナロジーを強調することになるであろう。この両者は互いに立場を異にしているかもしれないが、二人とも感情の力によって、また、一時的な事物への関心によって、さらに盲目にされてしまった人間であることを考慮すべきである。

*De Consolatione*の一節を解釈するとき、中世の哲学者たちは、Boethiusと哲学夫人との間で行われるダイアローグは「情熱」と「理性」との討論であると解釈している。一般に、Chaucerの描くTroilusは、Boethiusの描く

*De Consolatione*とは違って、哲学そのものを擬人化しているわけではない。にもかかわらず、例えば、「理性」と「感覚」に関する同じような討論が第四巻のTroilusの独白に現れていることは注目すべきであろう。哲学夫人が口にする返答は、最初は、人類一般に向けられ、次に、Boethius自身に向けられるのであるが、これと同じように、Troilusの心の苦しみも、哲学夫人がBoethiusに対して浴びせた、さらに、人類一般に浴びせた叱責と同じ叱責を浴びるかもしれない。したがって、Troilusの“double sorwe”に関する詩人Chaucerの「悲しみに満たされた」言葉を見ると、主人公の心的苦悩に対する詩人の共感の底流に、哲学夫人の言葉と同じように、叱責の意味が哀切の意味を織り交ぜながら流れていることが感じられるであろう。

Chaucerは一時的な事物に対する不安を伝統的なBoethius的態度によって表明しているものの、彼は主として愛人の“cares”⁽⁶⁾にその注意を集中させているようである。つまり、Chaucerは、結局、*De Consolatione*についての解説書を書いているのではなく、「愛の物語」を書いているのだ。だが、愛のコンテクストの側面から見ると、愛人が抱く不安はおおむね、Boethiusの伝統というよりむしろ、医学的伝統に属するイメージを獲得することができたといえる。中世およびルネサンスの外科医が人間の頭に関する病の範疇に入れていた*amor nobilis*が、結局、狂気もしくは死ということになり得たのは、⁽⁷⁾まさに、こうした“heroic love”の本質的特性があったからである。このような観念は、大陸の文学と同じように、イギリスの詩にも古くから記録されているが、特に、*The Knight' Tale*で描かれる“the loveris maladye of Hereos”とかSpenserのthe Horse of CareにおけるScudamourのordeal等がその好例である。Troilusにおいても、この観念は医学的意義に加えBoethiusのコノテーションを獲得している。主人公Troilusの“double sorwe”の中でわれわれが認識するのは、Boethiusと叱責する*De Consolatione*の哲学夫人の*cura*だけではなく、Avicennaとその後継者たちの*solicitudo melancholica*であろう。Boethiusと同じように、Troilusは“a commune seknesse to hertes that been deceyved”に落ち込んでしまったのであるが、しかしTroilusはBoethiusとは違って、哲学の「慰め」を得ることはなかった。

Boethiusの*affection*に関する注釈者たちと同じように、“heroes”に関する中世の議論は、理性の想像力への屈従とか、理性的判断の腐敗とか、誤謬に満ちた至福の概念と激しい世俗的欲望との結合等を主として強調して

いる。ちょうど、Boethiusの伝統が一時的な世俗的な善に基づく「喜び」の幻影を強調してきたように、医学的伝統も mistressの美の享受が最高の至福をもたらすといった誤った信念を「愛人」という言葉に対して強調してきたのだ。D.W. Robertson, Jr.も指摘しているように、Bernardusにとって、“heroes”は、結局、「物事を判断する能力の欠如」から生み出されるものであった。⁽⁸⁾つまり、愛人は自分のmistressを激しく求めるがゆえに、彼女を自らの目的とし、自らの至福とみなしてしまうからである。Savonarolaの説明によると、恋に熱中する愛人が下す判断は想像力と感覚によって腐敗させられているので、愛人は自分のmistressの真の価値を過大評価してしまうからである。⁽⁹⁾彼の誤謬に満ちた判断からすると、彼女を所有することが彼の真の至福であるように思われるのだ。Boethiusの注釈者たちが世俗的な善そのもののはかなさや脆さを強調したように、Savonarolaが愛人のはかなさや情欲の脆さを強調したのはまさにそのような理由があったからである。

Chaucerは“heroes”を、Boethius的枠組みの中に導入することによって、愛人が抱く不安を哲学夫人のtemporal caresに対する叱責へと従属させてしまったといえる。医学的伝統と倫理的伝統を結びつけることによってChaucerは、不安に関する二つの概念と誤謬に満ちた至福に関する二つの伝統的な概念とを結びつけてしまったのである。

詩人たちは、誤謬に満ちた至福の概念や善に関する意見を紹介した後、主人公Troilusを確たる永遠のヴィジョンへと誘い、“pleyn felicite”の認識を彼に与えている。つまり、詩人はこのepilogueで、愛人の正しい理性への復帰や理性的判断への復帰を説いているといえよう。Troilusの第八圏への上昇は、理想上の天国から実際の天国への前進であるのみならず、人間から創造主への“rational movement”である。したがってBoethiusが理性を通じて天上への道を歩むようになり、*stella erratica*の世界を瞑想することができたように、そのように、Troilusも肉体とその欲望から解放されて自由に“erratik sterres”を瞑想することができたのである。

[注]

使用Textは、L.D. Benson ed., *The Riverside Chaucer* (Oxford U.P., 1987)による。

- (1) Boethiusからの引用は、H.F. Stewart, E.K. Rand, and S.J. Tester trans., *Boethius: Tractates, De Consolatione Philosophiae* (Harvard U.P., 1978)による。
- (2) Boethiusの教義については次のような文献を参照するとよいであろう。1. Fritz Klinger, “De Boethii Consolatione Philosophiae,” *Philologische Untersuchungen*, Vol. XXVII (Berlin, 1921); 2. E.K. Rand, “On the Composition of Boethius' *Consolatio*

- Philosophiae*,” *Harvard Studies in Classical Philology*, XV (1904), 1-28 ; 3. Jan Sulowski, “The Sources of Boethius’ *De Consolatione Philosophiae*,” *Sophia*, XXIX (1961), 67-94 ; 4. E.T. Silk, “Boethius’s *Consolatio Philosophiae* as a Sequel to Augustine’s Dialogues and Soliloqua,” *Harvard Theological Review*, XXXIII (1939), 19-39 ; 5. Howard R. Patch, “Fate in Boethius and the Neoplatonists,” *Speculum*, X (1935), 393-404.
- (3) Robinsonによると、Chaucerの*De Consolatione*の翻訳 (Boece)は、疑いもなく、Latin originalの影響だけでなく、Nicholas TrivetのLatin commentaryやJean de MeunのもとされるFrench prose version等の影響を受けていることがわかる。cf. *The Works of Geoffrey Chaucer*, 2nd ed. (Boston, Houghton Mifflin, 1957) p.797.
- なお、Trivetの commentaryについては次のような文献が有益である。1. D.W. Robertson, Jr., *A Preface to Chaucer: Studies in Medieval Perspectives* (Princeton U.P., 1963) pp.23-27, 358-360 ; 2. Kate O. Petersen, “Chaucer and Trivet,” *PMLA*, XVIII (1903), 174
- (4) Troilusとトロイの町との関係は、Charles A. Owen, Jr., “The Significance of Chaucer’s Revisions of *Troilus and Criseyde*,” *MP*, LV(1957-1958) 1-5を参照。
- (5) Pseudo-Aquinasによると、人間は誰でも一時的な善に対して冷淡にならない、また、それらの不在を嘆くべきでもなければ、それらの存在を喜ぶべきでもないということになる。
- (6) “cares” (または “care”) という言葉は mistress を愛する lover (愛人) の sorrow と anxiety を示している (cf. *Troilus*, Book I. 505, 550, 587 ; iv. 579)。これは恋の病の症状、つまり、メランコリーを具体的に示すアリュージョンである。したがって、例えば、“colde care” (I. 612) とか “cares colde” (I. 264 ; III. 1202, 1260 ; IV. 1690 ; V. 1342, 1347) という表現は Troilus の内面を捉えるのに有益であろう。
- (7) Robert Burton, *The Anatomy of Melancholy* (London, 1837) II, pp.207-208.
- (8) Bernardus de Gordonio は Avicenna の意見にしたがい次のように記している。
“sollicitudo melancolica propter mulieris amorem...Et quia [philocaptus] est in continua meditatione: ideo sollicitudo melancolica appellatur.” cf. John Livingston Lowes, “The Loveres Maladye of Hereos,” *MP*, XI(1914), 491-456
- (9) Giovanni Michele Savonarola は次のように定義している。
“sollicitudo melancolica qua quis ob amorem fortem & intensum sollicitat habere rem quam nimia aviditate concupiscit... Dicitur sollicitudo quia tales facti iam melancolici ex amore inordinato sunt in continua cogitatione memoria & imaginatione: ita ut non dormiant neque bibant...”